

学会長ご挨拶 10・11月号

「先を観るということ」

コロナ禍で、私もオンライン会議やテレワークが多くなった。これを時間の余裕ができた
と捉える方に向かうには、それがはじまってからかなりの時間を要した。せかせかと何かを
していなければ落ち着かない性分も少なからず影響してのことだったろう。ところが2年
ほど前から、いわゆる動画配信サービスを利用するようになってからは、映画鑑賞にこの時
間を費やすことにはまった。家内のすゝめもあってはじめは一緒に観ていたが、当然、好み
が違うことから、いまは一人で楽しんでいる。私の選択傾向は、小さな映画館で上映される
ような少々マニアックなものやイタリア、フランス、スペイン、英国などヨーロッパを舞台
としたものだ。

そういえば、第24回日本歯科医学会学術大会の公開フォーラム「ダブルキャリアのすゝ
め」でご出演いただいた歯科医師と小説家を職とする方のお話を思い出す。この方も映画鑑
賞がお好きとうかがって、「映画の筋を小説の参考にされるのですか？」ときいたところ「映
画が終わった後に、例えばこの主人公はどのような人生を送るのかなど、そこから自分の頭
の中で想像をめぐらして小説にしていけることもある」とおっしゃった。まさに私も同じ。

「END」や「FIN」で納得するものではなく、一種の余韻といおうか、これからどうなるの
かを思い描く楽しみのある作品を選ぶことが多いのである。投稿評価では「終わりがすつき
りしない」と書かれている作品が、むしろ自分の好みだとあらためてうなづけたものだ。最
近は、1940年代の米国モノクロ映画もよく見る。私が生まれた頃のもので、きっと同じ世
代の視聴者が多いことを狙っての配信と推察できるが、どれも実にしっかりと作り込まれ
た作品だと思う。

1981年にフィンランドで暮らしていた時に、二人の子どもを連れて「007シリーズ」最
新作を観に行った。静かな北欧暮らしにやってきた久しぶりの大型娯楽映画だったからだ。
ところが、映画館の入口で足止めされた。係員が一生懸命に説明してくれるがフィンランド
語でさっぱりわからない。お互いに困っていると、やっと英語が話せる従業員がやってきて、
「この映画は殺人の場面が頻繁に出る。子どもに見せるものではない。」はじめは驚いたが、
強く納得できる理由なので、かえってスッキリした気分映画館を後にした。一方で、家庭
で見ているTV番組には全裸の人など平気で映っている国なのだ。40年以上前の話ではあ
っても、今も変わらない「子どもの教育」についての判断が問われている。

子どもといえば、最近「化石ハンター展」を見に行った。これは決して子ども向けではな
い。雄大な土地の岩や砂などから掘り出した大小の化石とその復元を中心に、彼らがどこ
からきてどのように生きどこへ去って行ったのかが推測できる。何しろ彼らが生きたその
一瞬が、そのまま止まっているのだから。大人が時間をかけてゆっくり見て回り、自分のお
かかっている環境やこれからの子どもたちの未来などにゆっくりと思いをはせることができ
る素敵な展示だった。

